

定例会（2019年1月19日）報告

「保護者支援のための療育的面接」 療育的面接による保護者支援企画プロジェクト

佐竹恒夫, 伊東由紀, 和泉千寿世, 岡崎朋美, 五味晃子, 柴玲子, 島村広美, 富井明日菜

菜

日時：2019年1月19日（土）13:00~17:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟

今回の定例会は、療育臨床スタッフが常日頃行っている保護者支援および面接の内容や方法論を検討するため、佐竹恒夫氏を中心に2015年に発足した有志のプロジェクト「療育的面接による保護者支援企画プロジェクト」からの報告でした。参加者は8~9名のグループとなり、グループごとに1名のチューターがつく講習会形式で行われました。

内容としては面接の練習方法としての「面接シミュレーション」、「役に立つツール」として「療育的面接による保護者支援フローモデル」や「言い方・伝え方の工夫」「面接のテーマ」についてなど、多くの実践的な提案がなされました。

「面接シミュレーション」では、実際の1症例の経過をたどりつつ、その中での保護者の相談をとりあげ、チューターが保護者役、参加者がセラピスト役となり保護者との面接をシミュレートしました。面談の流れやポイントなどのアウトラインがあらかじめ示され、内容のディスカッションを行った上で面接シミュレーションを行うため、どのグループもスムーズにシミュレーションが行われていました。参加者からは面接技術の向上のための練習方法として有効であり、職場でも実践したいとの感想が挙げられていました。

「役に立つツール」として提示された「療育的面接による保護者支援フローモデル」は、フォーマットに記入することで、面接の経過を俯瞰的にとらえ分析することが可能となり、参加者の方からも「ぜひ使ってみたい」との意見が多くあげられました。

「言い方・伝え方の工夫」では、セラピストが保護者の発言にどのようにつなげるか、次のステップを見据えてどうなげかけていくか様々なパターンがあり得ること、またそれをセラピストが使い分けていくことの有効性が示されました。また「面接のテーマ」をどう設定し選択していくのかなど、明日の臨床から実践できる多くの具体的な提案と考え方の枠組みが示されていました。

保護者面接や保護者支援は療育上非常に重要であるにもかかわらず、その手法や考え方を検討したり学ぶことのできる場は少なく、今回の定例会は貴重な場となりました。



<参加者の声>

- ・面接シミュレーションを行う事で、普段の面接であったり、受け答え方、間の取り方等、勉強になりました。自分の面接の振り返りにもなりました。
- ・実際のシミュレーションでは、訓練ではなく、面接場面を人に見られることがないので、他の人の意見は参考になった。
- ・フロー（療育的面接による保護者支援フローモデル）を見直すことで療育の回を重ねるごとに項目間のつながりが可視化できて1回1回の療育のつながりをしっかりとつなげて考える癖が身に付きそうだと感じた。
- ・子どもを連続的に・継時的に見ることはあるが、保護者とのやりとり、変化をこうした流れに乗せるのは新たな視点だった。
- ・私はまだSTとしての経験が浅いので保護者面接はいつも緊張しながら、一つ一つことばを選んでいく状態です。言い方・伝え方の工夫を具体的に教えていただけて勉強になりました。
- ・次のステップへの投げかけ方について、ひとつの型だけではなく、いろいろな型を親御さんと状況に合わせて使い分けることが大切だと確認できた。
- ・保護者と情報や子どもの姿を共有し、その上で具体的な提案をしていけるとよいんだと感じた。話を展開するポイントを知れてよかったです。